

『なんだろう おもしろそう やってみたい もっと・・・』

～子どもが主体的に活動するための保育者の在り方～

貞松 朋子・河口 智津子・江口 未希子・本田 純一

はじめに

草津市立大路幼稚園と草津市立第六保育所を母体として、2018年にたちばな大路こども園が開園した。この背景には「草津市幼保一体化推進計画(平成27年～平成31年)」があり、その計画のひとつとして公立の幼稚園と保育園を統合し、幼保連携型認定こども園が作られることとなった。

当初は公立の教育・保育の流れを受け継ぎつつ、京都橘学園のリソースやマネジメント力を生かし、地域に根差した教育・保育の実践に取り組んできた。同時に教育認定（1号認定）の子どもたちと保育認定（2・3号認定）の子どもたちが、安心してのびのびと生活し、豊かで実りある経験ができる時間・空間・仲間づくりを通して、心の根っこを育む教育・保育を進めてきた。

本園の立地は、JR草津駅から徒歩7分の場所にあり利便性が高い。そのため、利用者は京都や大阪へ通勤している保護者が多い。また、駅前には大型のマンションや商業施設、商店街があり、県内外からの転入者も多く、ほとんどが核家族で地域との関わりは希薄である。宅地開発が進むにつれ自然も減少している。しかし、町の中心を旧中山道が通り、草津宿本陣や小汐井神社など、歴史を感じられる場所も多く、宿場祭りや獅子舞など日本文化を身近に感じられる土地柄でもある。草津駅から少し離れた所には、かつて天井川であった草津川が流れ、今ではその跡地を利用して、自然と触れることのできる「de愛ひろば」が作られ、子ども達の散歩コースの一つになっている。

本園の子どもたちは明るく人懐っこく活発であり、身近な人に親しみをもってかかわったり、様々な事象に興味をもってじっくりと取り組んだりする姿が見られる。一方で、失敗したくない思いからすぐに諦めてしまったり、初めてすることなどに苦手意識を強くもったりする子どももいる。核家族や共働き家庭が多く、頼れる人が近くにいないため子育てに不安を抱えたり、時間に追われる毎日を過ごしたりする保護者も多くみられる。早朝から延長まで長い時間を園で過ごす子どもも多いことから、園で充実した生活の保障を

していくこと、丁寧な保護者連携が必要である。

乳幼児期は、心はずむ様々な体験から、「おもしろそう」「なんだろう」と興味をもち、試したり、気づいたりする繰り返しの中で学び、あそびを深めていく時期である。夢中になってあそびを楽しむ中で、達成感や充実感を味わい、自己肯定感を高めたり、協同する楽しさから人への信頼感を深めたりできると考える。

さらに、あそびの充実感から「もっとしたい」という次への意欲や諦めずに取り組む気持ち、「次はこれをしてみよう」と興味を広げることや「やってみよう」と踏み出す自信も育むことができると考える。また、自然環境の中で過ごすことにより、自然の移り変わりや生き物を観察したり、雨の当たる音や水の流れる音を聞いたり、砂や土の感触を味わったり、風や光などを肌で感じたりと、心も体も全身をフル活動させることができる。五感を通して感じることで、豊かな感性を育み、好奇心や探求心を膨らますことができると考える。

そこで、一人ひとりの子どもが自分の好きなあそびにじっくり取り組み、心が動く体験を重ね、夢中になって遊ぶ心地よさを感じるために、研究主題を『なんだろう・おもしろそう・やってみたい・もっと・・・』と設定した。子どもが主体的に活動するための保育者の在り方としての環境づくりや子ども達の育ちを支えるかかわりについて研究を進めていきたいと考えた。また、その子どもの育ちが保護者への安心感にもつながると考えた。

0・1歳児の見えた！触れた！感じた！と思える瞬間のまなざしや、声、身振り手振りからそれを感じ取り、共感する保育や2・3歳児の手を伸ばしてみようとしたり、草木・虫をつかまえみようとしたり、意欲に繋がっていく姿を認める保育、4・5歳児の繰り返し経験することの先に、自分から挑戦したり、達成感を感じたりする姿に、そっとよりそい応援する保育を大切にしながら実践を進めてきた。特に今年度は、0・1・2歳児の保育に焦点を当て、保育者の在り方について、本論文に記したい。

1. 研究主題のとらえ方

『心が動く』とは・・・

・ 不思議なものを発見した時の	あれあれ	“なんだろう”	興味・関心
・ 何かを見つけた時の	わくわく	“おもしろそう”	好奇心
・ どうなるか期待をもった時の	どきどき	“やってみたい”	試行錯誤
・ 体験を上回るものを知った時の	うきうき	“もっと”	意欲

あそびや生活において、保育者や友だちとの温かい触れ合いを通して心が安定している状態の時、様々なことに会い、心が動き、挑戦しようとすることができる。その中で満足感、達成感、充実感を味わいさらなる意欲につながっていく。繰り返す中で自ら動き出す主体性が生まれ、自己肯定感が育まれていく。

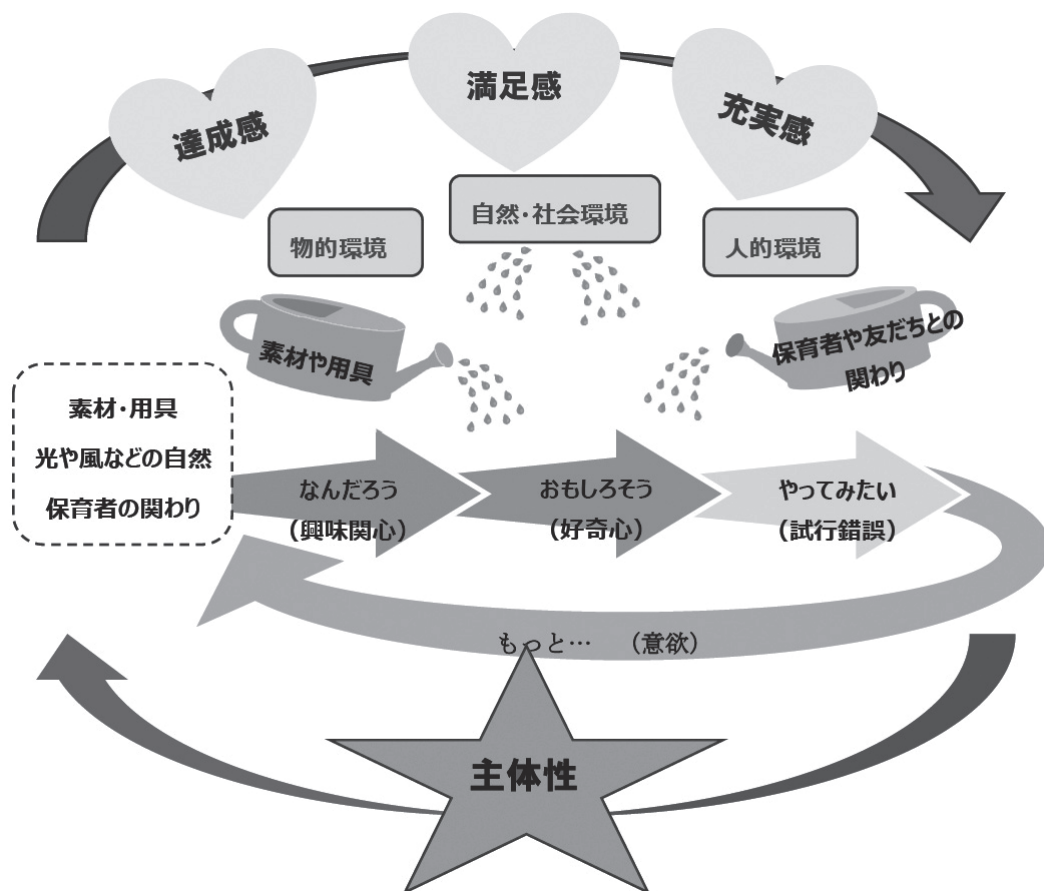


図1 本園が考える子どもの主体性が育つ道筋

2. 研究の仮説

子どもを取り巻く環境として“人的環境”“物的環境”“自然・社会環境”などがある。今年度の園内研究においては、子どもを取り巻く保育環境の中でとりわけ『保育者の在り方』に焦点をあて実践を進めてきた。子どもたちが様々な環境の中で何を感じ、何に興味をもち、どうやってかわかっていくか、『心が動いた瞬間』を探り、タイミングを逃さずに共感する保育者がいることで、さらなる喜びや探求につながる。その繰り返しの中で、

満足感や充実感、達成感を味わいながら主体性が育まれていくとの仮説を有している。

3. 研究の内容と方法

①教材研究（担任）

②研究保育

- ・園内公開保育…全クラス対象（年9回）

園庭環境にかかわる子どもの姿を記録

- ・事後研修……………振り返り（担任）、記録を発表（参加者）、

環境図に記録した付箋を貼る、考察、語り合い

③保育の見直し（担任）

④全体の振り返り（全職員）

- ・10月に前期5回のまとめ、3月に後期4回のまとめ

⑤年度末に幼児、乳児より1クラスずつ考察を含めた実践報告

⑥来年度に向けての話し合い（全職員）

【研究保育の日程】

5/15(水)	5歳児つき組	9:30以降 3、4、5歳児担任1人が記録を取る (保育中に他のクラスの先生も研究保育をしているクラスの様子を見ておく)
6/19(水)	5歳児ほし組	14:30～15:30 事後研修
7/22(水)	1歳児よつば組	9:30以降 0、1、3歳児担任1人が記録を取る (保育中に他のクラスの先生も研究保育をしているクラスの様子を見ておく)
8/7(水)	2歳児ののはな組	
9/18(水)	0歳児ふたば組	
11/7(水)	4歳児	9:30以降 3、4、5歳児担任1人が記録を取る (保育中に他のクラスの先生も研究保育をしているクラスの様子を見ておく)
12/11(水)	4歳児	
1/15(水)	3歳児	9:30以降 3、4、5歳児担任1人が記録を取る (保育中に他のクラスの先生も研究保育をしているクラスの様子を見ておく)
2/13(水)	3歳児	

※9/11(水) 全クラス公開保育（キャリアアップ）

表1 研究保育の日程

4 - 1. 実践事例（乳児）¹

本園では、各クラスが年に1回、園内研究として園内での研究保育をおこなっている。今年度のテーマは『環境づくり』であり、子どもたちが自らやってみたいと思える環境を、人的・物的の両面から探り、実践を進めている。そのなかで、乳児としては（1）各クラスの取り組みとして、①7月22日に1歳児よつば組が「水と遊ぼう」～自分の好きなあそびを見つけて～という活動名でおこない、②8月7日に2歳児のはな組が「みずってきもちいいな ～友だちや保育者と一緒に水あそびを楽しもう～」という活動名でおこない、③9月18日には0歳児ふたば組が「これなんだろう？ 気になるものや楽しいものがいっぱい～保育者の下で安心してながら～」という活動名でおこなった。それぞれのクラスが同じ「水」を使ったあそびを取り入れた保育をおこなったことから、乳児のそれぞれの学年の違いや発達段階に応じての取り組みなど、成長の変化を感じることができた。また（2）乳児全体保育研修として、9月11日には「水のひろばであそぼう！～安心して好きなあそびを存分に楽しむ～」を行った。それぞれの実践事例、事後研修は以下の通りである。

（1）各クラスの実践事例

①1歳児よつば組 「水と遊ぼう」～自分の好きなあそびを見つけて～

研究保育をした1歳児は、園舎裏にある乳児園庭を全面使用し、1歳児だけでゆったり、じっくり遊べる環境を作った。タライに水を張り、手作りの金魚やスポンジ・お玉などを用意した「ゆったり遊ぶコーナー」、ホースやペットボトルなどがついて水の流れる様子が楽しめる「水あそびタワー」、水を流して遊ぶ「樋流し」、シートを敷いて水を少し貯めた「ジャブジャブ池」などがあり、それぞれのコーナーで自分のしたいあそびを見つけ、自らかかわっていく姿が見られた。ただ水に触れるだけでなく、水を汲んだり流したりするなど1歳児なりに考えて遊ぶ場もあり、様々な発見や気づきが五感を刺激し、意欲的に遊ぶ姿が見られた。自分の気が済むまで遊ぶ子ども、いろいろなあそびを試す子ども、友だちの姿を見ている子どもがおり、それぞれが自分の興味をもったあそびを選べる環境になっていた。



図2 金魚がいっぱい



図3 水遊びの環境

乳児園庭を全面的に使用することで、シェードなどを利用してペットボトルシャワーを上部に取り付けたり、地面にブルーシートを敷いて水を溜めたりするなど、ダイナミックに遊べる環境になった。一方でゆったり遊べるコーナーもあり、それぞれの子どもの姿に応じて選べるようになっていた。1歳児が遊ぶのに十分な広さがあり、かつ全体を見渡せる空間であった。保育者を身近に感じる距離であり、子どもたちは安心して遊ぶことができ、保育者も安全管理に留意することができた。普段の様子から子どもの水あそびでの姿を想像し、一人ひとりのあそびが充実するような材料用具を準備することができ、子ども理解が深まるとともに、職員間の連携も密に取ることができた。また、乳児園庭は1歳児の保育室すぐ横に立地し、保育室から直接出入りができることも子どもたちが安心して存分に遊べる要因のひとつであったと考える。また、物的環境の他に、人的環境として保育者の援助のタイミングも適切であり、保育者の思いが強くないように場面に応じて見守る姿もあった。どのコーナーも様々な手作り玩具があり、研究保育に参加した保育者たちも、思わず子ども達と一緒に遊んでしまうほど魅力的な環境であった。



図4 ペットボトルシャワー



図5 樋から流れる金魚見ている

事後の話し合いでは、準備されていたカップやバケツが1歳児の扱いやすいサイズになっていたこと、水を汲んで流せる位置にタライが用意されていたことなど、子どもたちが「やってみたい」と思った時にすぐに遊べる環境であった。樋流しでは、1歳児でも流れていく様子が目で追えるよう、樋の長さや流れる速さや角度が考えて設定されていた。

それぞれの子どもの発達や興味に応じての「適した材料用具」、「用具の配置」の大切さを感じることができた研修であった。

②2歳児のはな組 「みずってきもちいいな」

～友だちや保育者と一緒に水あそびを楽しもう～

7月から色水あそびや散水ホースで水を浴びることなどを楽しんでいた2歳児は、さらにダイナミックに遊べるビニールプールを用意したり、金魚すくいなどで手先を使ってじっくり遊べるようにしたりする中で、水あそびを存分に楽しむ姿や見立てあそびやごっこあそびを友だちや保育者と楽しむ姿も見られていた。そこで、寒天や色水を用意したり、樋を使ったウォータースライダーを作ったりするなど、友だちと楽しさを共有できるようなあそびも設定されていた。2歳児保育室前にコーナーを作っており、園庭全体が見渡せる場所で、全身を使って伸び伸びと遊ぶ解放感を味わえるようになっていた。園庭全体と繋がっている場所ではあるが、色水あそびなどを継続して楽しんでいた場所でもあったことから“自分たちの場所”という意識もあり、コーナー間を移動しながら自分の好きなあそびを楽しんでいた。繰り返し楽しみ試す姿が多く見られ、できたことや発見したこと、気づいたことを保育者や友だちに伝える姿も見られた。



図6 全身で水を感じる



図7 寒天遊び



図8 寒天のごちそう



図9 ウォータースライダー

事後の話し合いでは、子どもからそれぞれのコーナーが見える位置に配置を工夫されていたので、友だちの遊ぶ姿に興味をもち、あそびを広げていく様子も見られた。寒天コーナーでは、寒天を入れている容器の淵が少し高くなっていたことで、こぼさず掬うことにつながっていた。淵を利用して掬おうとする姿も見られ、どうすれば掬いやすいのか何度も試す姿が見られた。掬った寒天をカップに入れてゼリーに見立てたり、黄色と青色の寒天が混ざり緑になったことに気づいたりするなど、想像を膨らませたり、物の変化を楽しんだり、それぞれの子どもが自分なりの楽しさを見つけて遊びこむ姿がたくさん見られた。また、作ったものを「みてみて!」と保育者に見せたり、樋流しでは友だちに「やってー! (水流して)」と声をかけたりするなど、子どもたちの声がたくさん聞かれていた。

心が動いた瞬間、誰かと共有したいという思いが溢れていた。またあそびを通して、掬う動作が食事のスプーンの使い方に繋がるなど、あそびが生活へとつながっていく場面も多々見られた。あそびと生活が別々のものではなく、繋がっていることを、2歳児の子どもの姿から改めて感じる事ができたなど多くの考察が得られ、学びとなった。

③0歳児ふたば組 「これなんだろう? 気になるものや楽しいものがいっぱい」

～保育者の元で安心しながら～

0歳児は、7月頃から少しずつ水に触れる機会を重ね、8月には一人にひとつのタライを用意し、それぞれが水の中に入って遊ぶことを楽しんでいた。9月に入っても暑い日が続いていたので水あそびを継続した。子どもたちは自らタライの水を触ったり、保育者がペットボトルシャワーで水をかけたりすることを楽しんでいた。歩行が徐々に安定してきたこともあり園庭への探索も活発になり始めた頃であった。研究保育の際は、氷や寒天に触れて感触や冷たさを感じたり、保育室前に作った専用の砂場で遊んだり、1・2歳児が遊んでいる場所へ探索に行ったりなど、他クラスの子どものと一緒に過ごすことも楽しんでいた。0歳児は個人の発達の差が大きく、座位が安定するようになった子どもから歩行する子どもまで様々な姿が見られる中で、すべての子どもが安心して遊べること、また、それぞれの探求心の芽生えを捉え、様々なものに触れる機会を大切に環境を設定した。

砂場あそびでは砂場を身近に感じられるよう保育室前に砂場を作り、砂をふるいにかけてサラサラにすることで触感をよくし、少しずつ慣れていけるようにした。寒天は少し固めに作り、口に入らないようなサイズにするなど子どもたちの様子に合わせて配慮した。



図10 水ってきもちいいね



図11 砂場あそび

事後の話し合いでは、担当保育者がいるという安心感から少しずつ行動範囲も広がってきていると感じられた。気になるものを見つけて保育者から少しずつ離れていく姿や、保育者の方を振り返って存在を確認する姿、何かを見つけて嬉しい時に担当保育者の顔を見て笑いかける姿など、安心感が根底にあることが感じられた。他児や保育者が砂場で遊んでいる様子が見えやすいことで、子どもが興味をもつきっかけになり、気づくと多くの子どもが砂場でのおそびを楽しんでいた。「砂場でゆったり遊びながら周囲に目をやると気になるものがある。あっちに行ってみよう」と探索にも繋がっていた。近くで1歳児や2歳児が遊んでいることもあり、あまり抵抗を感じることなく探索に行く姿も多かった。寒天あそびはどの学年でも楽しんでいたが、0歳児は少し固さがあることで、摘まんでもすぐには潰れず、でもぎゅっと握ると潰れたり、引っ張ってちぎったりすることもできたのではないかな。乳児の公開保育が続いていたことと、あそびの内容が似ていたことから、それぞれの学年の違いを感じることができたなど活発な感想や考察が出て充実した研修となった。

（2）乳児全体保育の実践事例

乳児「水のひろばであそぼう！」～安心して好きなあそびを存分に楽しむ～

乳児全体での研究保育をおこなった。本園の園庭は乳幼児が一緒に使用しているが、乳児の保育室前を乳児のスペースとしており、乳児が主となって遊んでいる場である。0・1・2歳のそれぞれの研究保育の後に、乳児全体での水あそびの環境を設定し、研究保育を実施した。学年という枠組みを超えて、乳児全員で遊べる楽しい「水のひろば」を作り、安心してのびのびと遊べる保育を実践した。乳児の職員が連携してどのクラスの子どもにも丁寧に対応し、一緒にあそび、子どもたちの心の動いた瞬間に寄り添うことを心がけた。



図12 好きなあそびを楽しむ



図13 どこで遊んでもいいよ

事後の話し合いでは、学年ごとに子どもたちが安心できる場を確保しながら、場を共有することで、それぞれのしたいあそびを行き来して楽しむことができた。学年という枠組みを取って“乳児”と大きくとらえた環境づくりをおこなったことで、それぞれの子どもたちの発達や興味関心に合わせた保育をおこなうことができた。普段から学年ごとに全員が楽しめる保育環境作りを心掛けてはいるが、学年内にも月齢差や個人差があり、遊びたいあそびが異なる時もある。今回、0・1・2歳児が共有して遊べる環境を作るために、学年の枠を超えて、職員間で子どもの姿やあそびについて話し合いを重ね、連携を取ったことで、それぞれの子どもが自分の気になるコーナーへ行きあそびを楽しむ姿につながった。また計画的にあそびを進めたことで、それぞれの学年の枠を超えるかかわりにつながったと感じる。7月から水に触れて遊び始め、8月にそれぞれのクラスで存分に水あそびを楽しんだ後の9月だったからこそ、学年の枠を超えて一緒に楽しむことができた実践を振り返った。

4 - 2. 実践事例を通して

研究保育をおこなうことで改めて自身の保育を振り返る機会となり、自己研鑽をすることができた。一つの方法用具について思考を深めていったり、子どもの見取りについて話し合ったりすることで、自身の考えの幅が広がり、いろいろ気づきをもって、学びは大きかった。また、個人としての学びだけでなく、話し合う中で職員間の絆が深まったり、連携をとることの大切さを感じたりして、職員関係の向上にも繋がった。職員連携がスムーズであれば子どもたちの対応もスムーズになり、子どもたちが存分に自己を発揮しながら楽しむことができる環境を創り出すこともできる。保育者自身の保育力向上が、“人的環境”としての保育者のかかわりとなり、子どもたちの興味関心を広げるきっかけになっていった。あそびと生活は繋がっていることを実感できたことも大きな学びになった。あそびの

『なんだろう おもしろそう やってみたい もっと…』～子どもが主体的に活動するための保育者の在り方～

中でスプーンや柄杓を使って物を掬う動作は食事の際のスプーンの動作になったり、腕や足を動かすことが着脱の動きになったりする。あそびを充実させて存分に遊ぶことでお腹が減り、給食をおいしく食べられ、ほどよい疲れと満腹感から気持ちよく午睡に入ることができる。あそびの充実が生活全体へと関わり、安定した生活習慣の獲得へと繋がっていく。生活の安定が心の安定にもなり、そこからまたあそびへ向かう力となっていく。特に生活面を大切にしている乳児だからこそ、あそびと生活は切っても切り離せない関係であり、相互に影響し合いながら子どもたちの成長につながっていくことを実感できた。

5. 保護者支援

乳児保育の大切な役割のひとつに保護者対応・支援がある。初めて集団保育を経験する子どもたちにとって、保護者と保育者の関係はとても重要である。専門家としての知識を持って子育てに参加する保育者は、養護だけではなく、教育と一体化した教育・保育を保護者に伝えるアドバイザーとしての役割も担い、知識の面からも保護者支援を行っている。保護者支援の観点から以下のような取り組みを行っている。

○連絡帳の活用

家庭と園との情報共有をする上で連絡帳を活用している。日々の子どものコンディションや食事の情報、午睡の時間、排便の様子などの健康管理を含め、子どもの様子をエピソードと共に伝え、情報の共有に役立てている。時には相談事の対応にも活用している。

月(日) 日(日)	お迎え時間()	体温()	寒暖()
()	()	()	()
19020021022023000102030405060708090100110120130140150160170			
(食事、睡眠、排泄、入浴、お散歩等の生活記録をご記入ください)			
夕食	おやつ	排便	午睡
()	()	()	()
0歳児		1・2歳児	
連絡事項	連絡事項		

図14 0歳児連絡帳

月 日 曜日	
家庭での様子	こども園での様子
(夕食)	便の様子 給食の様子
睡眠時間	起床時間
体温	排便の様子・様子
その他	
本日のお迎え	その他

図15 1・2歳児連絡

○クラスだより

月に1回クラスの様子や成長の記録を配信して伝えている。こども園での生活、子どもの発見や気づきの姿を写真を交え、エピソードと共に伝えている。



ふたばぐみ だより

2024 年度 9月号

たちばな大路こども園

9月の前半はまだ夏のような暑さで、夏同様に園庭で水あそびを楽しんでいました。最近になり、ギラギラと照りつけていた太陽が秋の優しい日差しへと変わってきているように感じます。秋は、『食欲の秋』『読書の秋』『スポーツの秋』『実りの秋』などいろいろな『秋』があります！これから、0歳児なりの様々な秋を楽しんでいきたいと思います。


園庭あそび




水や霧天、水などの感触を楽しんだり、砂場で遊んだりしています。最初は苦手だった芝や砂の感触も、遊んでいるうちに慣れてきました！



ここに水があります！



水の中の霧天！



1歳児や2歳児のコーナーへ行き、遊ぶこともありますよ！



作りました！
保育室前に小さな砂場を作りました！



たくさんの「なんだろう？」（不思議）と出会いました！



手についた葉っぱも気になります。







保育参加

保育参加を11月～2月の間おこないます！

★申し込みは前月の25日までに、保育室内にある申し込み用紙にご記入ください。

★参加される保護者の方には当日の登園時間や持ち物が記載されている紙を後日配布させていただきますので、ご確認ください。（その他詳細は、Brainの配信をご覧ください。）



絵本貸出

にじみそえす!!

10月から絵本貸出を始めます！

絵本貸出とは、園の絵本を子どもが1冊選び、1週間貸出をおこなうものです。子どもが選んだ絵本をご家庭で、親子で楽しんでいただき、1週間後に園へ返却をしてください。

★実施日：毎月第4金曜日（前後することがあります）

★返却日：翌週の金曜日

絵本を15日までに持って来て下さい。

図16 0歳児クラスだより（9月号）



図17 1歳児クラスだより（9月号）

ののほだより

たちばな大路こども園
2024年9月30日発行

夏の暑さも和らぎ、秋の匂いや気持ちの良い風が感じられるようになりました。9月は、絵の具や泡あそび、感触あそびを楽しみました。絵の具あそびでは、始めはおそろおそろ絵の具に触れていましたが、今では両手いっぱい絵の具をつけて模造紙やパネルに「どーん」「てがいっぱい」と嬉しそうに手形をつけています。ついた絵の具を指先で触れたり、手で広げたり、上から他の色の絵の具を塗り重ねることで、「むらさきになった」と色の変化に気づく姿もありました。たくさん遊んだ後は、スポンジに泡をつけてパネルや手を洗うことも楽しんでいました。泥や水あそびから色水・寒天・泡・絵の具など様々な感触あそびを満喫することができました。

10月は、気候も良く過ごしやすい季節となるので、身体を存分に動かして遊びたいと思います。園内を探索したり、虫探しをしたり、秋の自然物にも親しんでいきたいと思います。

好きな色の絵の具を両手いっぱいにつけて遊ぶことを楽しんでいました。



最近では、友だちとのやりとりが増え、こっこあそびを楽しんでいます。おききさんこっこでは、「どこがいたいですか?」「はがいたいです」「おくらあけてください」となりきっている姿が見られます。



ネフスビール
凹凸の形をした積み木を組み合わせてタワーを作っています。



引越ゲーム「いろいろどんないろ?」
色水あそびで色名前に興味をもった子どもたち。「あかいろ」「あおいろ」など、伝えだ色のマットやフープに移動する遊びです。引越しができたことに大喜びです。

★ お知らせ ★

- ・トレーニングパンツを履き始めてから、排泄に興味をもつ子どもが増えてきました。ご家庭での排泄の様子と園での様子を伝え合いながら、それぞれに合ったペースで進めていきたいと思ひます。10月以降も引き続き、トレーニングパンツのご準備をお願いします。
- ・朝晩と気温が低くなってきました。衣服の調節ができるように、ロッカーの中に半袖と長袖を入れておいてください。よろしくお祈ひします。
- ・10月からおやつのエプロンとおしぼりは使用しません。給食の分だけご準備ください。こぼれやすいおやつの時にエプロンだけ使用することもありますので、引き出しの中に1枚エプロンを入れておいてください。
- ・11月より保育参加を実施します。詳細はBrain配信をご確認ください。

図18 2歳児クラスだより (9月号)

○保育参加

毎日の生活リズムを大切にしている乳児保育では、年間を通じて行事を少なくしている。幼児になると、音楽会・運動会・生活発表会などの行事があり、保護者はその行事を通して子どもの成長を感じることができる。しかし、毎日の生活の中で“同じ生活リズム・同じ物的・人的環境を大切にしている乳児保育では、季節の行事のみで大きな行事はないので、行事を通して子どもの成長を見たり感じたりすることは難しい。そこで「保育参加」を実施し、こども園での保育に保護者も一緒に参加し、子どもが集団の中で過ごしている様子や、保育者が日々どのように子どもたちにかかわっているのか見てもらっている。給食も一緒に食べ、日常の保育を体験してもらっている。また、できるだけ保護者と保育者が同じ思いをもって子どもにかかわれるよう、保育参加後に希望に応じて担任・看護師・管理職との面談も行い、保護者の相談の窓口になっている。

「保育参加」では、乳児の保護者に対しても、子どもたちが安全で安心できる保育環境や生活リズムの中でどのような活動を経験しながら過ごしているのか見てもらい、家庭とは違う姿も知って、家では見られない姿を共有してもらうことを目的にしている。

○保護者アンケートより

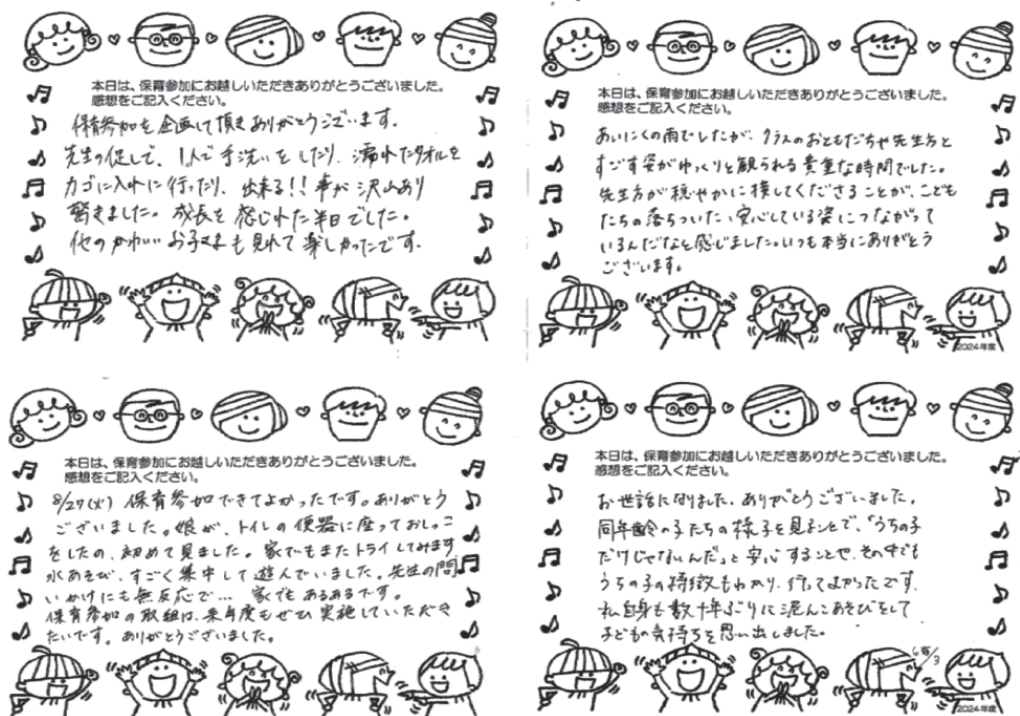


図19 保護者アンケート

6. 園内研修の成果と今後の取り組み

今年度の取り組みの成果は5点ある。

第1に、行動指針の本を作成したことで職員の目標や思いが一つとなり、園全体の共通理解につながったことである。

最初に職員全体で本園の地域の実態、保護者の実態、子どもの実態について語り合った。そこから本園で取り組むべき課題が明らかになり、①あかるくげんきにえがおであいさつ、②はなそう！きこう！いろんなおもい、③「これなあに？」やってみたいあそびがいっぱい、④「なかまだよ」みんないっしょにたすけあおうの4点の視点を持った行動指針の本を作成し、各クラスの取り組みやドキュメント写真・エピソードを書き込み、職員全体に“見える化”を図った。各クラスの取り組みをお互いに見ることで職員の意識づけを図り、互いの保育を理解することにつながった。また、廊下や職員室に掲示することで、保護者にも園の取り組みを知ってもらうきっかけになった。今後もさらに内容の充実を図りながら子どもの思いを見る力をつけていきたい。

第2に、園内研究会を実施したことは保育者のスキルアップにつながったことである。

園内研修目的は、保育者の新たな知識やスキルの習得、保育者間の意見交換や情報の共有、今抱えている課題や悩みの共有を図ることで、より質の高い教育・保育と園全体の資質向上を目指すものである。これまで、日々の教育・保育や行事の準備などに追われる中、職員同士で教育・保育について意見交換する時間、スキルアップのための時間がなかなか取れずにいた。ここからもう一段ステップアップすることを目指し、今年度より研究主題を定めて園内研修に取り組んできた。『なんだろう おもしろそう やってみたい もっと』を共通の研究主題とし、必ず1回は研究保育をすることを目標に取り組んだ。最初は負担であった指導案作成も、作成する中で、活動の値打ちや子どもに付けたい力は何かを考え保育にあたることで、環境の準備や関わり方を考えて教育・保育に臨むことができ、自分の保育を振り返り環境を再構成していくことにつながっていった。今後は、保育参観できる期間を1日から3日と幅をもたせて、一人でも多くの職員が参加できるようにしたい。また、私たちの保育実践に示唆していただき、さらに充実した保育展開ができるよう、外部講師を招く研究会も実施していきたい。

第3に、研究協議の日時を工夫することで職員が参加しやすくなり、乳児幼児の交流にもつながったことである。

事後研修には少しでも多くの保育者が参加しやすい乳児の午睡時間13：30～14：30に行

うことで、より多くの職員が研修に参加できた。参加が難しい場合は、代表者が参加し、各クラス・学年にもち帰って共有したり、資料を回覧したりして共有を図った。参加しやすい時間や、短い時間でも内容の濃い研修ができるよう写真や動画を用いたことで、多くの職員が研修に参加し、一人ひとりの学ぼうとする意欲、意識が高まった。今後もいろいろな話し合いの方法を考えながら、参加者が全員で作る研修会にしていきたい。

第4に、本稿では紙面の関係で詳細に取り扱わなかったが、キャリアアップの公開保育をしたことは様々な角度から保育を考える機会となったことである。

さまざまな視点から評価を受けることで新たな気づきや学びを得ることができた。客観的な意見をもらうことで、自分の保育を見直すことができ、子どもの様子や保育者のかかわりをいろいろな側面から確認することができた。保育者の発言や行動を他者に見られるため緊張感もあり、自分自身では気づかなかった改善点や課題を見つけることができ、次の保育に活かすことができた。今後も年に1度はこういう機会をもち、全職員が同じ方向に向かって、気持ちを一つに取り組める機会を大切にしたい。

第5に、クラス会議や学年部会、主任会などディスカッションの機会を定期的にもつことで活発な意見交換ができるようになったことである。

日々の保育で生じる課題や悩みを保育者同士で共有し、解決に向けて意見を交換し合うことができた。保育者同士のチームワークやコミュニケーション力も向上し、それぞれの価値観や視点から意見を交換することができた。今後も、だれでもが思いを表現できる話し合いになるよう工夫をしていきたい。

おわりに

『なんだろう おもしろそう やってみたい もっと…』と子どもの心の動く瞬間を見逃さず、子どもの気持ちに共感し、寄り添う保育を積み重ねてきている。

じっと一点を見つめたり、あれあれと不思議そうな顔をして「なんだろう」と心が動いている0歳児の子どもたちに「なんだろうね」と語りかけたり、「あれ あれ」と指差ししてわくわく心が動き、保育者に共感を求めている1歳児と同じ方向を見て、何を感じているのか考察したり、「せんせい、これなに？」と意欲的に挑戦する2歳児の子どもたちと一緒にドキドキを感じながら一緒に遊ぶ。このような乳児保育を実践することで、子どもたちの心の根っこが育ち、「生まれてきてよかった」「大切にされている」という安心感と自己肯定感が育くまれ、幼児保育へとつながっていく。そのためにも更なる充実した研

修の機会を作り、職員切磋琢磨してたちばな大路こども園の特色ある保育を目指していきたい。

また、これからのたちばな大路こども園は、地域に根ざした子育て支援の拠点としての役割を担っていかなければならない。現在、大路まちづくりセンターや小汐井神社との連携を始めている。高齢者の方に来てもらいお正月あそびをしたり、大路地区イルミネーションの飾り付けをしたり、小汐井神社へ獅子舞いを見に行ったりと、これまでの連携を継続していきたい。また子育て支援事業として、一時保育や園庭開放、子育て相談などの在園児以外の方にも教育・保育の提供も行っている。今後もさらに、京都橘学園のリソースを活かし、よりよい教育・保育を提供し、地域の子育て支援のよりどころとしてのたちばな大路こども園を目指していきたい。

註

- 1 本稿における「乳児」とは、0、1、2歳児のことを示す。